

映画『生きる』 LIVING



黒沢明の名作『生きる』のリメイク版である。第二次大戦後の東京から当時のロンドンに舞台を移し、脚本はノーベル賞作家の日系英国人カズオ・イシグロが担当している。余命を宣言された市役所課長の主人公が、残された時間の中で為すべきは何かと問う。リメイク作はおおむね原作を超えないと言われるが、幸いにも(?) 黒沢作品を観ていない私はこの作品を先入観なく鑑賞することができた。

主人公を演じる舞台出身のビル・ナイの静謐で奥行きのある演技、部下を演じるエイミー・ルー・ウッドの温もりのある自然体の演技など、俳優達の好演によりいつのまにか物語に引き込まれていた。中でも、余命を知った主人公が酒場でスコットランド民謡「ナナカマドの木」を唄うシーンでのビル・ナイの歌声が胸を打つ。黒沢作品では志村喬が「ゴンドラの唄」を歌っているようだ。昔、その歌がしみじみと良かったと母が言っていたのを思い出した。

黒沢作品を観たいとレンタル店に出かけたが、DVDは貸し出し中だった。
(小野はつね)

稲垣栄洋著『面白すぎて時間を忘れる雑草のふしぎ』

(三笠書房)



最寄り駅のビル七階に書店がある。NHKの朝ドラ「らんまん」の放送開始以来、牧野富太郎博士に関連した本が店頭の一部を占め、傍らに植物に関わる本が並んでいる。ベテランの女性店員が「売れています」と薦めてくれた。

「ちぎれやすい茎の「強さ」とは何だろうか？」等、雑草への疑問がタイムリーに提起され、それぞれ明快に説明してくれるのでテンポよく一気に読み進む。雑草には雑草の命をつなぐ知恵があり、したたかに生きている。その個人的な暮らしぶりを二十六種の雑草を挙げて、ユーモアを交え興味深く紹介している。愛情に満ちた視線で観察し続けて来られた長年の研究に魅了され、親本である『身近な雑草の愉快な生きかた』(筑摩書房)を購入。全五十種の繊細なペン画のイラストと雑草の愉快な奥深さを堪能した。

この他の著書に、限られた命を懸命に生きる姿を描いた『生き物の死にざま』(草思社)がある。命のバトンをつなぐための「死にざま」の哀切と感動。そして著者がコスモス会員であることが何より嬉しい。
(四野宮和之)